

ミュケナイ・ギリシアの香料

山 川 廣 司

は じ め に

紀元前二千年紀後半に東地中海域を中心に展開したいわゆる「東地中海世界」は、それぞれの文明の発展段階は異にしながらも、相互に接触・交流を持つ国際社会であったといわれているが¹⁾、その有り様の一端を示す交易についても、近年の考古学の発掘成果は有益な情報を与えてくれる。例えばバス(F.G.Bass)によるウル・ブルンUlu Burun沖の沈船の発掘は紀元前14、13世紀頃の東地中海域での実際の交易品の出土を齎らした。それらは銅、錫、金など種々の金属をはじめ、貴石、象牙、ガラスの原料、オリーブ、葡萄酒、穀物、武器に至るまで実に多様であった²⁾。またミュケナイ陶器が地中海各地から発掘されるという考古学の成果によって、その交流範囲はかなり広範な地域に及んでいたことがわかっている。筆者も以前この問題について考察³⁾し、ミュケナイ・ギリシアでは、農業・手工業生産品を王国各地から徴集した王宮は、自らの工房に所属する職人および王の役人を通して在地の職人に命じて種々の製品を作らせ、それを輸出向けに独占的に管理する一方、王の役人を中心にギリシアでは産出しない金属や象牙、琥珀などの製品原料を輸入するといった交易活動の存在を仮説した。

ところで、これらの交易品の中には、原産がミュケナイ・ギリシア以外の地の産品であったと思われる香料もあったが、同様の香料名が線文字B粘土板文書のなかにも記載されている。香料が人々の嗜好品、医薬品などとして古来か

ら如何に珍重されてきたかは周知の通りであるが、これら香料名が文書に記載されているということは、すでに紀元前二千年紀においてミュケナイ社会に広く知られており、それらの一部は交易品として取引されていたと推測できる。

そこで、本稿では、考古学の成果および線文字B文書の分析を通して、実際にどのような香料がミュケナイ社会の人々に知られており、それがどのような用途に利用されていたのか、また香料に関わって文書では実際どのような内容が記録されていたのかをみていきたい。

1. 東地中海世界での香料交易品

ミュケナイ・ギリシア人が必要とした原材料のうち、ギリシアでは入手不能で、そのほとんどを輸入に頼なければならなかった代表的なものが銅、錫、金、銀などの金属であったが、1984年よりG.F.バスが中心となって行なわれたウル・ブルン沖での水中発掘によって明らかになった紀元前14～13世紀初頭頃に沈没した船の積荷からもそのことが証明されている。ところでその発掘成果を相次いで公刊しているバス⁴⁾によれば、それらの積荷のなかに香料が含まれている。オリーブ、アーモンド、コエンドロからは油ベースの香料が作られ、紫貝の貝殻は粉末にして香料の原料として利用されていたし、100個以上のカーン製の壺に詰められていたテレピン樹脂は、香料の原料として使用されていた。その他、染料の原料として紫貝、ヘンナ（ミソハギ科に属する灌木）、石榴の外皮、ベニバナ、シューマック（鞣料・染料）、キュプロスあるいはウガリトから輸入された媒染剤の明礬などがあった。

3000年以上前に沈んだ船の積荷は、銅などの金属類は別として、穀物などの食料や香料などはすでに消滅したものも多く、これら残存していたものがすべてというわけではない。またセム系原産のコエンドロのような芳香植物は、元来はシリアから渡来したかもしれないが、すべてが輸入されていたわけではなく、ギリシア国内でも栽培されていたであろうし、それらは香料の原料としてだけではなく、料理の調味料、薬味としても利用されていたであろう。

ニバナ (花) 3kg, ⑥ミント 2束, ⑦ショウガ (?)⁷⁾ 1束, 11単位 (?)⁸⁾。

② Ge 603

- .1A []ka-ra-to, *155 1
 .1 ke-po, KO AROM T2 / ka-na-ko, re-u-ka v1 da-ra[]mi-ta-ge 20
 ka-na-ko, e-ru-ta-ra, M1
 .2A ka-na-ko M1 *155 1
 .2 pu-ke-o KO T2 KU v2 MA z2 SA z2 ko-no 10
 e-ne-me-na 1 []
 .3 i-na-o KO T2 KU v1 [[MI 20]] ko-no 10 E1 ka-na-o e-ru- (ta-
 ra) M1 []
 .4 ra-ke-da-no KO T2 KU v2 [[MI]] ko-no 12 E 1 *155 1
 .5 a-ke-re-wi-jo KO T2 KU v1 MA v1 no-ko 10 DE[] *155 1
 .6 pe-ke-u KO T2 KU v1 z 2 MA v1 ko-no 10 E 1
 ka-na-ko M2 *155 1
 .7 pu-wo KO T2 KU v2 MA v1 [] ko-no DE 1 *155 1
 v.1 pe-[]2

この②文書は、上記の査定文書に基づいて行なわれたと思われる実際の貢納量の記録である。ここでは7名あるいは8名の貢納者名とその貢納量が記されている。まず1行目では、Ke-poがコエンドロ19.2[㊦]、白ベニバナ1.6[㊦]、ドゥラバとミント20(単位不明)⁹⁾、赤ベニバナ1kg、籠1個¹⁰⁾を貢納している。同様に2行目では、Pe-ke-oがコエンドロ19.2[㊦]、クミン3.2[㊦]、ウイキョウ0.8[㊦]、ゴマ0.8[㊦]、ベニバナ1kg、籠1個、ショウガ10、1単位¹¹⁾を、3行目では、I-na-oがコエンドロ19.2[㊦]、クミン1.6[㊦]、[[ミント20]]、ショウガ10、E1単位、赤ベニバナ1kgを、4行目では、Ra-ke-da-noがコエンドロ19.2[㊦]、クミン3.2[㊦]、[[ミント]]、ショウガ12、1束、籠1個を、5行目では査定文書の地区A-ke-re-uと関係する名前のA-ke-re-wi-jo¹²⁾がコエンドロ19.2[㊦]、

クミン1.6[㊦]、ウイキョウ1.6[㊦]、ショウガ10、[?]束、籠1個を、6行目では、Pe-ke-uがコエンドロ19.2[㊦]、クミン2.4[㊦]、ウイキョウ1.6[㊦]、ショウガ10、E 1単位、ベニバナ2kg、籠1個を、7行目では、Pu-woがコエンドロ19.2[㊦]、クミン3.2[㊦]、ウイキョウ1.6[㊦]+、ショウガ1束、籠1個を、裏面はPe-[?]が[?]2とあり、内容不明の品2(単位不明)を貢納している。ここではそれぞれの貢納香料がほぼ画一的な分量を一定の順番で記載している。

③ Ge 604

- .1 ke-e-pe, o-pe-ro, ka-na-ko e-ru-ta-ra [] DE 1 KU v 1
- .2 i-na-o-te, o-pe-ro KU v 1 SA v 1 ko-no 2 se-ri-no M 2 *155 1
- .3 ra-ke-da-no-re, o-pe-ro e-ru-ta-ra M 1 MA v 1 SA v 1
- .4 a-ke-re-wi-jo, o-pe-ro e-ru-ta-ra M 3
- .5 pu-ke<o o>-pe-ro-ro ka-na-ko M 1 MA z 2 SA z 2 ka-da-mi-ja[

この文書は、①の査定文書と②の実際の貢納文書との関連で、貢納不足を記したものであると思われる。¹³⁾ 1行目では、おそらくKe-pe-eと表記すべきところを書記が誤って綴ったと思われるが、Ke-po(与格)による不足¹⁴⁾として、赤ベニバナ[?]kg、[?]1束、クミン1.6[㊦]、2行目では、I-na-oによる不足として、クミン1.6[㊦]、ゴマ1.6[㊦]、ショウガ2、セロリ2kg、籠1個、3行目では、Ra-ke-da-noによる不足として、赤ベニバナ1kg、ウイキョウ1.6[㊦]、ゴマ1.6[㊦]、4行目では、A-ke-re-wi-joによる不足として、赤ベニバナ3kg、5行目では、Pu-ke-oによる不足としてベニバナ1kg、ウイキョウ0.8[㊦]、ゴマ0.8[㊦]、カルダモン[?]㊦が列挙されている。この文書の特徴は与格で示される人名に次いでo-pe-ro(ὀφέλογ, deficit)¹⁵⁾が明記されていること、またGe603と順序は若干異なるが、5名ともGe604に記されていることである。以上をまとめれば以下の表になる。

表 1

| 人 名 | コエンドロ | クミン | 白ベニバナ | ウイキョウ | ゴマ | 赤ベニバナ | ミント | ショウガ | |
|---------------|-------|-------|-------|--------|----|-------|-------|--------------|--------------------|
| Ke-po | T2 | | v1 | | | M1 | 20? | | 155 1 |
| | | v1 | | | | M [] | | DE 1 | |
| Pu-ke-o | T2 | v2 | | z2 | z2 | M1 | | 10 | e-ne-me-na 1 |
| | | | | z2 | z2 | M1 | | | Ka-da-mi-ja [] |
| I-na-o | T2 | v2 | | | | M1 | [20] | 10 E 1 | |
| | | v1 | | | v1 | | | 2 | se-ri-nom 2 |
| Ra-ke-da-no | T2 | v2 | | | | | [?] | 12 E 1 | 155 1 |
| | | | | v1 | v1 | M1 | | | |
| A-ke-re-wi-jo | T2 | v2 | | v1 | | | | 10 DE [] | 155 1 |
| | | | | | | M3 | | | |
| Pe-ke-u | T2 | v1 z2 | | v1 | | M2 | | 10 E 1 | 155 1 |
| Pu-wo | T2 | v2 | | v1 [] | | | | DE 1 | 155 1 |

* 上段は貢納量, 下段は不足量

このようにGe603とGe604は貢納と不足という相関関係を示しているが、そのことからキルレン¹⁶⁾は、A-ke-re-wi-jo=アケレウの人とは、A-ke-re-uといったような特定の地域で香料貢納の任に負わされた人であり、少なくともコエンドロ、クミン、ウイキョウ、赤ベニバナの量が全く同じであることから、①のA-ke-re-u 地区での査定文書と実際の貢納の結果生じた不足がGe604文書であると解釈している。ただし、ここでは査定で記録されている白ベニバナ、ゴマ、ミントが貢納文書、不足文書両方に記載がないことの説明がつかない。

④ Ge605+607 [+] 605a

- .1 pe-se-ro [] ka-na-ko M 2 [ka-] ra-to *155[]
- .2A [ka-na-ko] e-ru-ta-ra M 3 ka-na-ko re-u-ka v1 ma [-ra-tu-wo mi-] ta PE 1 sa [-pi-de]
- .2B pu-ke / [] T 2 ku-mi-na v1 sa-sa [-ma] da 14[]
- .3A ka-na-ko, e-ru-ta [-ra] ka-na-ko re [-u-ka] z 2 []
- .3B pe-ke-u / ko-ri-ja-da-na T 2 [] ku-mi-no z []
- .4A ka-na-ko, e-ru-ta-ra M 2 P 1 ka-na-ko re-u [-ka]
- .4B ka-e-se-u / ko-ri-a₂-da-na T 2 ku-mi-no z [] vacat
- .5 ke-po / ko-ri-a₂-da-na T 2 *155 1 [] vacat
- .6A ku-mi-no z 2 ka-ra- [] sa-pi-de 12
- .6B i-na-o / ka-na-ko re-u-ka [] sa-sa-ma z 2 mi-ta PE 1

この貢納文書もGe602の⑤不足文書とセットをなしている。1・2A行目では、Pe-se-ro がベニバナ 2 kg, 赤ベニバナ 3 kg, 白ベニバナ1.6㍑, ウイキョウ[?] 籠, 籠?個, ミント 1 束, 容器 (箱)¹⁷⁾? 個を, 2B・3A行目では、Pu-ke が [コエンドロ?] 19.2㍑, クミン1.6㍑, ゴマ?㍑, ?]-da 14[, 赤ベニバナ?

kg, 白ベニバナ0.8㍑を, 3B/4A行目では, Pe-ke-u がコエンドロ19.2㍑, クミン?㍑, 赤ベニバナ 2kg, 1束, 白ベニバナ?㍑を, 4B行目では, Ka-e-se-u がコエンドロ19.2㍑, クミン?㍑を, 5・6A行目では, Ke-po がコエンドロ19.2㍑, 1籠, クミン0.8㍑, 籠?個, 容器(箱)12個を, 6B行目では, I-na-o が白ベニバナ?㍑, ゴマ0.8㍑, ミント1束を貢納している。

⑤ Ge602

- .1 jo-o-pe-ro, a-ro- [] mi-jo / pe-se-ro [[sa-sa-ma]]
 .2 pu₂-ke / ma-ra-tu-wo z1 [] vacat
 .3 pe-ke-u / ku-mi-no-jo [ma-ra-] tu-wo v1 sa-sa-ma z2 sa-pi-de 6
 .4A e-ru-ta-ra [sa-] sa-ma v1
 .4B ka-e-se-we / ka-na-ko [] ma-ra-tu-wo v1 sa-pi-de 6
 .5A e-ru-ta-ra [] 1
 .5B ke-po / ka-na-ko m [] v1 mi-ta, PE 2 ko-no-a-po-te- [*]
 .6A [] 2
 .6B [] vestigia [] 1 DE 1 *155 [] vacat

これも欠字の多い文書であるが, ④に記載されている人名が同じ順番で列挙されている。1行目の頭書きをa-ro- [mo-ta]-mi-jo と復元すれば, 本来貢納すべき香料 (*ἀρώματα*) を借用している (ho ophlon) 者として, Pe-se-ro が [[ゴマ] ?㍑, 2行目で, Pu₂-ke がウイキョウ0.4㍑, 3行目で, Pe-ke-u がクミン?㍑, ウイキョウ1.6㍑, ゴマ0.8㍑, 容器(箱)6個, 4A・4B行目では, 書記の誤記の可能性が考えられるが, 与格 (dat.) でKa-e-se-u の名前が記され, その後赤ベニバナ?kg, ウイキョウ1.6㍑, ゴマ1.6㍑, 容器(箱)6個が列挙されている。5A・5B行目では, Ke-po が赤ベニバナ?kg, 品目不明1.6㍑, ミント2束, 両種のショウガ (skhoinoi amphoterai), 6A・6B行目では, 文字の痕跡が残っていることから, 6番目の人名I-na-o と復元することが可能である。とすれば, I-na-o が [?] 2 (単位不明), [ショウガ?] 1, 1

束、籠?個の不足を記録していることになる。

これらの文書は、Ge603,604と同じように香料の貢納・貢納不足という形でセットで記録されていた。上記のような種々の香料がギリシア国内で生産されたか輸入品かは文書からは不明であるが、ミュケナイ王国内でも、香料が貢納品として国内各地から王宮に徴発されていた実態が読み取れるであろう。

(B) クノッソス出土文書 (KN Gaシリーズ)

クノッソスでも概して断片的であるが、香料を記録した文書がある。それらは主にコエンドロとキュペロス¹⁸⁾、フェニキア・スパイス (herba phoenicea)¹⁹⁾を記載しているが、いくつかの書式に分類される。まずは人名と香料名が記されているものをみってみる。

① Ga 415

ru-ki-ti-jo ko-ri-ja-do-no AROM 1 T 6

Luktos (中部クレタの地名) の人 コエンドロ 144 $\frac{1}{2}$ ℓ

② Ga 416

a-ke-re-u / pa-i-to AROM 9 T 2

A-ke-re-u (人名) ファイストス (地名) 香料 883.2 $\frac{1}{2}$ ℓ

クノッソスに次いで重要な王宮があったファイストスで、その名前はわからないが、多量の香料がA-ke-re-uによって貢納されている。

③ Ga 1536 + 5776

.1 pa-i-ti-ja AROM 34[

ファイストスの人 香料 3264 $\frac{1}{2}$ ℓ

④ Ga 417

.A po-ni-ki-jo M 5

.B qa-mo / ko-ri-ja-do-no AROM 1 [

lat.inf. ta-u-na-so KO v 1

Qa-mo (地名) の人 フェニキア・スパイス 5 kg, コエンドロ 96 $\frac{1}{2}$ ℓ,

(粘土板の厚み幅の下部部分) Ta-u-na-so (人名) コエンドロ 1.6 $\frac{1}{2}$ ℓ

⑤ Ga 418

.A po-ni-ki-jo M 3

.B su-ri-mi-jo / ko-ri-ja-do-no T 5

Su-ri-mo (地名) の人 フェニキア・スパイス 3 kg, コエンドロ 48[㊦]

⑥ Ga 423 + 7366

.A po-ni-ki[-jo

.B qa-ra-jo / ko-ri-ja-do-no AROM 2 [

v. da-wa-no, e-we-de-u [

Qa-ra (地名) の人 フェニキア・スパイス ?, コエンドロ 192[㊦]

(裏面) Da-wa-no (Dwanos), E-we-de-u (人名)

⑦ Ga 517

.A ku-pi-ri-jo

.B tu-wi-no, / ku-pa-ro *124 1 [

Tu-wi-no (人名) キュプロスのキュベロス 96[㊦]

この文書は、カヤツリグサ科単子葉植物のキュベロスがキュプロス産であると
その産地名が明記されている点で注目される。

⑧ Ga 676

.A ko-ri-ja-do-no

.B tu-wi-no-no / ku-pi-ri-jo AROM 6

Tu-wi-no (人名) の香料作り職人(unguent-boiler)²⁰⁾ Ku-pi-ri-jo (人名)
コエンドロ 576[㊦]

パーマーは、ku-pi-ri-jo を *κύπρος* = ヘンナ (ミソハギ科に属する灌木で、そ
れから油を採取) との連想から、スパイス名(*κύπρος*)と解釈してるが、こ
こでは最初の人名が所有格で記されていることから、⑦の人物と思われる
Tu-wi-no に所属している職人Ku-pi-ri-jo とするDocs. の解釈に従う²¹⁾。

⑨ Ga 1533

e-]ki-si-ja, AROM 12 [

E-ko-so の人 香料 1152[㊦]

次にa-pu-do-si(ἀπόδοσις, 支払・返還)の語が記されている文書をみてる。

⑩ Ga 421

.A] a-pu-do-si ko-ri-ja-do-no T 5

.B]-ti-jo

] -ti-jo (人名) はコエンドロ48^{1/2}を支払った。

⑪ Ga 424

.A po-ni-ki-jo

.B pa₃-ko-we-i-jo / a-pu-do-si M 5

Pa₃-ko-we (地名) の人はフェニキア・スパイス 5 kgを支払った。

⑫ Ga 425

]pa-ra-u-jo a-pu-do-si po-ni-ki-jo M 1

Pa-ra-u-jo (人名) はフェニキア・スパイス 1 kgを支払った。

⑬ Ga 427 + 8102

.1 da-wi-jo / a-pu-do-si po-ni-ki-jo di-ta-ka-so M 8 N [] o [

.2 e-pu₂-no / po-ni-ki-jo M 8 N 1 o M 1 N 1

この文書で注目すべきは、支払い額の後、o-pe-ro の略記oで不足量も記載されていることであろう。まず1行目では、Da-wo (地名) の人がDi-ta-ka-so (dat.) にフェニキア・スパイス 1 kg + 250 g × ? を支払ったが、[?] kgの不足、2行目では、E-pu₂-no (人名) がフェニキア・スパイス 8.25 kgを支払ったが、1.25 kgの不足が記録されている。これは香料の支払いが行なわれたが、何らかの事情で不足が生じたことを示しているのであろうか。

⑭ Ga 1530 + 1531

.1]si-jo / o-pe-ro

.2 da-wi-jo, / ki [-ta-no

.3A [a-pu-] do-si

.3B [*]-je- [] / [ki-ta-] no AROM 11 o 2

- .4A a-pu-do-si
 .4B pu-na-si-jo / ki-ta-no AROM 11 o 1 [
 .5 vacat
 .6 to-sa AROM 58
 .7 to-so-de / o-pe-ro AROM 11
 .8 vacat

ここでは、香料 ki-ta-no の支払いと不足が記録されている。ki-ta-no については、*Docs.*²²⁾ では一種の薬味としているが、メレナ²³⁾ は、gitanon=ハナハッカ科の植物、あるいは kirtanos=テレビンの木 (*Pistacia terebinthus*)²⁴⁾ の別形で、ki-ta-ra は広くピスタチア科の他の植物も含む名称とし、現在ではこの解釈が一般に受け入れられている²⁵⁾。まず1行目で、] si-jo (人名) の不足、2行目で⑬でみられた Da-wo の人がテレピン樹脂と記載されているが、具体的内容はわからない。3行目では、[・] -je- [] (人名) がテレピン樹脂を1056[㊦]支払っているが、192[㊦]が不足している。4行目では、Pu-na-so (地名) の人がテレピン樹脂1056[㊦] (を支払ったが)、96[㊦]が不足している。そして6、7行目では、テレピン樹脂支払い総計5568[㊦]、不足総計1056[㊦]と記載され、恐らくこれがクノッソスで扱われたテレピン樹脂の総計と思われる。

⑮ Ga 518

- .A] za-we-te-ra [
 .B a-] pu-do-si *124 10 [
 今年の支払い キュペロス 960[㊦]

za-we-te-ra=tsāwe (s) terā (this year's) から、クノッソスでの今年のキュペロス支給総計文書と思われる。

その他貢納先を明示した文書がある。

⑯ Ga 674

- .A pe-ma
 .B] ma-ri-ne-we, / ko-ri-ja-do-no, AROM 10

Ma-ri-ne-u への献納, コエンドロの種子 960[㊦]

与格で記される Marineus について, チャドウィック²⁶⁾はGg713やAs1519文書から, 宗教に関連して現われるこの名前を神の名前と解釈し, またメレナ²⁷⁾は, 香料を製造する作業場がマリネウスの神域にあったとし, 職業名と推測している。いづれにせよ, マリネウスに関係する団体にコエンドロの種子が献納されたことを示唆している。

⑩ Ga 675

wa-na-ka-te, / [[ko]] pe-ma AROM 10

王 (wanax) への献納 コエンドロの種子 960[㊦]

このようにクノッソスでは, その種類は限定されているが, 概して大量の香料が献納・支払いされ, その際の不足量も記載されていた。またテレビン樹脂やキュペロスに関するクノッソスでのその年度の総計記録の存在は, 王国内でかなりの規模でこれら芳香材料を使って香料生産が行なわれていたことを推測させる。

(C) ピュロス出土文書 (PY Un-シリーズ)

これらの文書は献納文書で, 家畜, 穀物, 葡萄酒などが記載されているが, その中に香料もある。香料名が記録されている文書をいくつかみってみる。

① Un 2

.1 pa-ki-ja-si, mu-jo-me-no, e-pi, wa-na-ka-te,

.2 a-pa-e-ke, o-pi-te-ke-e-u

.3 HORD 16 T4 *125 T1 v3 o v5

.4 FAR 1 T2 OLIV 3 T2 *132 s 2 ME s1

.5 NI 1 BOS 1 OVIS^m 26 OVIS^f 6 CAP^m 2 CAP^f 2

.6 SUS+SI 1 SUS^f 6 VIN 20 s1 *146 2

1行目でピュロス王国の聖域があったSphagiānes 地区で行なわれた王の入

信式の祭儀に際しての献納品目録である²⁸⁾ことが述べられ、2行目でo-pi-te-ke-e-u (役職名)が以下の物品を徴集したとし、③大麦1574.4㍓、キュペロス14.4㍓、不足8㍓、④小麦115.2㍓、オリーブ307.2㍓、品目不明19.2㍓(液量)、蜂蜜9.6㍓(液量)、⑤無花果96㍓、牡牛1頭、牡羊26匹、雌羊6匹、牡山羊2匹、雌山羊2匹、肥えた豚1頭、雌豚6頭、葡萄酒585.6㍓(液量)、織物2が列挙されている。ここでは祭儀に際して行なわれた献納の品目の中に香料のキュペロスがみられ、特にこの品目についてのみその量が不足していたことが明記されている。

② Un 249

- .1A po-ti-ni-ja-we-jo
 .1B pi-ra-jo, a-re-pa-zo [-o] ku-pa-ro₂ AROM 2 T 5
 .2 wi-ri-za LANA 2 [] *157 10
 .3 vacat [KAPO T 6
 .4-5 vacant.

この文書は香料が誰によって、どのような用途で処理されていたのかを知る手がかりを提供してくれる。その内容は、ポトニヤ女神に所属する香料作り師Pi-ra-jo (人名=Philaios?)がキュペロス240㍓、羊の根毛60kg、品目不明10単位、果物?57.6㍓を支給されている。ここでのキュペロスは女神に捧げる香油を作るためであったろう。また羊毛がここに記載されていることについては、キルレンの研究から、未加工の羊毛には羊毛脂(ラノリン)が豊富に含まれており、軟膏作りに利用されていたとするチャドウィックの説明²⁹⁾は説得的である。

③ Un 267

- .1 o-da-ke, a-ko-so-ta
 .2 tu-we-ta, a-re-pa-zo-o
 .3 tu-we-a, -re-pa-te [, ze-so-me]
 .4 ze-so-me-no [ko]

- .5 ko-ri-a₂-do-na AROM 6
 .6 ku-pa-ro₂ AROM 6 *157 16
 .7 KAPO 2 T 5 VIN 20 ME 2
 .8 LANA 2 VIN 2
 .9-11 vacant

頭書きで「かくてA-ko-so-ta (人名) は、香料作り師 Tu-we-ta に、軟膏状に煮詰めて作られる香料のため以下の芳香材料を支給」するとして、⑤コエンドロ576[㊦]㊦、⑥キュペロス576[㊦]㊦、品目不明16単位、⑦果物240[㊦]㊦、葡萄酒576[㊦]㊦(液量)、蜂蜜57.6[㊦]㊦(液量)、⑧羊毛60kg、葡萄液³⁰⁾ 57.6[㊦]㊦を列挙している。

④ Un 592

- .1]ko AROM 8 T 8
 .2]6 M 2 KAPO 3 T 4
 .3]s 1 v 4 ko AROM 4 T 4
 .4]s 1 v 3 LANA 6
 .5]T 5 ra-ka, *154 21

この文書は左部分が欠損しており、人名などは不明であるが、香料名はわかる。①コエンドロ844.8[㊦]㊦、②品目不明182kg、果物326.4[㊦]㊦、③品目不明16[㊦]㊦(液量)、コエンドロ422.4[㊦]㊦、④品目不明14.4[㊦]㊦、羊毛180kg、⑤品目不明48[㊦]㊦、芳香植物*154 21単位とかなり大量の香料が記録されている。これは何かの総計文書かもしれない。

ピュロス文書は、主として軟膏を作るためと使用目的を明示した上で、主にキュペロスとコエンドロを芳香材料として香料作り職人に支給していたことを記録している点で注目される。また王の入信式という祭儀に際して香料が献納されていたことは、②のポトニヤ女神の神域に仕える香料作り職人との関連から、神域内で使用される香料の材料とみられる。

以上、ミュケナイ・クノッソス・ピュロス出土の線文字B文書に記載された香料名を手がかりに分析してきたが、ここで再度コメントを加えながらそれぞ

れの香料についてみていきたい。

- (a) ko-ri-ja-da-na(coriander)－コエンドロ MY Ge605, PY Un267, KN Ga34, 415, 417, 418, 419, 421, 422, 423, 673, 675, 676, 685, 738, 834, 7367

文書に最も多くあらわれるコエンドロはセリ科の植物で、その実は現在でも香味料、消化剤に用いられている。KOの略記でも記録されているコエンドロの原産はインドで、エジプト経由で齎らされたが³¹⁾、文書で扱われている量はかなりの分量で、それだけ広く流布、利用されていたと思われる。

- (b) ku-mi-no, ku-mi-na (kumīnon, cumin)－クミン MY Ge602, 603, 604, 605, 606

KUと略記されるクミンはセリ科の多年草で、その名前はセム語起源であるが、エジプト・エチオピア原産でガラティア・キリキアでも栽培されていた³²⁾。果実は薬味、薬用として利用される。この香料はミュケナイ文書のみで記録されている。

- (c) ka-na-ko (knākos)－ベニバナ MY Ge602, 603, 604, 605, 606, 608

ベニバナはキク科の多年草で、文書ではe-ru-ta-ra (赤)とre-u-ka (白)の2種類に分類され、記録されている。赤ベニバナは乾量で記録され、それは花の部分で、赤い染料を作るために利用されたのに対し、白ベニバナは青白色の種子で、重量で表記されている。その種子から油が採られ、医療や料理に使用された³³⁾。このようにベニバナはその用途に従って花と種子に区別して記載されていた。

- (d) ma-ra-tu-wo (marathwon)－ウイキョウ MY Ge602, 603, 604, 605, 606, KN Ga953?, PY Un219?

MAと略記されるウイキョウはセリ科の植物で、薬味や香料として利用されるほか、その種子からは芳香油が採れる。この植物は地中海に広範に分布しているが、文書では乾量で表記されていることから、種子を記録したものと思われる。

(e) sa-sa-ma (sēsamē) – ゴマ MY Ge602, 603, 604, 605, 606

SAと略記されるゴマは、セム語からの借用語であるが、その種子はそのまま食用に利用される場合もあるが、主に香りの強い油が採取された。今日世界中で最も愛用される植物の種子である。現在のところミュケナイ文書でのみ記録されている。

(f) mi-ta (mintha, mint) – ある種のミント MY Ge602, 603, 605, 606

MI?と略記されるミントは、シソ科ハッカ属の植物の総称で、文書ではPEのイデオグラムを伴って単位（束？）表記がなされているが、どれ位の量で、どのような用途に利用されていたかは不明である。ミントは広く分布しており、一般によく知られた芳香植物であった。またka-ra-ko (glākhōn) – ハッカ類 (MY Ge605) もあるが、チャドウック³⁴⁾は、これは誤読とされているので、取り下げるべきとしている。

(g) ko-no (skhoinos) – ショウガ MY Ge602, 603, 604, 606,
KN Ga953[+]955,

この語が何を示すのか、実体把握は難しい。ギリシア語 *σχοίνος* に比定して、藷草（トウシンソウ属の植物）とする解釈のほか、香料製造で使用されていたショウガで、後にも同じ目的でシリアから輸入されていた芳香植物であるとの説もあるが、Docs.では恐らく葛蒲 (sweet rush) あるいはショウガ (ginger-grass) ではないかとしている³⁵⁾。

(h) ku-pa-ro, ku-pa-ro₂ (cyperus) –キュベロス(カヤツリグサ)

KN Ga465, 517, 518, 519,

PY Un2, 249, 267, 443,

クノッソスとピュロスの文書に記録されているキュベロスは、カヤツリグサ科単子葉植物で、ピュロスではその種子から香油を作るのに使用されている。その名称からキュプロス経由でギリシアに齎されたものであろう。これはピュロスとクノッソスの文書にみられるが、特にクノッソスでその年の支給総量として10単位(960²ℓ)を記録していることは注目される。

(i) ki-ta-no (kritanos) –テレビンの木, 乳香 KN Ga1530+, X1385

この語は、前述のようにメレナがテレビンの木(kritanos)の別名に注目してピスタチア科の植物の総称と解釈しているが、ここではその樹脂であろう。この木はエーゲ海沿岸やレバントでも生育しているが、シリア・パレスティナが原産であった。テレビン油は一般にはマツ科植物の樹脂を蒸留して得られた油状・揮発性の液体で、エジプトでは現在でも香料の原料として利用されているが、ウルブルン沖の沈船から見つかった100個以上のカナン壺からは概算で1トンにのぼるこの樹脂が詰まっていたとバス³⁶⁾は報告している。クノッソスでは総量58単位(5568²ℓ)という莫大な量の支払いがなされていたということは、これを材料にした香料作りがかなり広範に行なわれていたことであろう。

(j) po-ni-ki-jo (phoinikion) –フェニキア・スパイス(棗椰子の実?)

KN Ga417, 418+ (m), 420,

423 + 7366, 424, 425, 427 +

8102

クノッソス文書だけに記載され、重量で表記されている植物であるが、未だによくわからない。ドゥオー³⁷⁾は①フェニキアの木の果実である棗椰子³⁸⁾、②確定できないフェニキアの生産品、淡黄褐色(φοινίξ)の特定できない生産

物の解釈を列挙している。チャドウィック³⁹⁾はphoinix という名詞は椰子の木の意味もあり、棗椰子の実の解釈も可能であるが、クレタでは棗椰子は生育するが、気候の関係で結実せず、従ってその語は依然謎のままであるとしている。ここでは一応 Docs. の翻訳に従っておく。

(k) ka-da-mi-ja (kardamon) – カルダモン(コショウソウ) MY Ge604,
ミュケナイ文書1箇所にも記されているが、その辛味のある種子は特にペルシアで薬味として利用された⁴⁰⁾。

(l) se-ri-no (serinon,celery) – セロリ MY Ge604,
これもミュケナイ文書1箇所に記述されているだけであるが、2kgと重量表記されていることから、種子が利用されたのかもしれない。

上記のように文書に記載されている植物名は、古典ギリシア語を通して現在までよく知られているものや意味が曖昧なもの、まったく不明のものなどに分類される。

またその用途として、①主として食物に添加するための香辛料、調味料、②芳香性のある植物を原料に作られる香料、③医薬品⁴¹⁾の原料などが考えられる。

おわりに

紀元前二千年紀後半の交易の主体は金属や高価な嗜好品、穀物や葡萄酒、オリーブなどの農業生産物であった。そのなかの一つに香料があった。それは原産がエジプト・シリアをはじめとするオリエント諸国やオリエントよりさらに東方の地域から齎らされたものであっても、その当時のギリシアで栽培生産されているものや気候等の理由で生産できないものまで多様であった。

ところで線文字B文書は、ミュケナイ・クノッソス・ピュロスそれぞれの王国で生産された香料を、王宮への貢納・不足・総計、王宮による分配に項目を分類して香料名とその分量とともに記載しているが、どれが交易によって外国

から輸入されたものか区別はできない。徴集は恐らくギリシアで栽培されていた芳香植物であったろうが、王宮はそれらを輸入されたものと一括して薬味・香料製造の必要に応じて職人等に分配していた。そのような香料原料が線文字B文書に記録されていたのである。そして現在でも我々に馴染みのある芳香植物がすでに調理用、芳香用、医療用として利用されていたと思われる。それらのあるものは交易品として輸出に向けられたであろう。香料が交易の中でどれだけのウエートを占めていたかはわからないが、貴重な交易品としてまた主に社会の上層部の人々の嗜好品として愛用されていたと思われる。

<註>

- 1) 太田秀通, 『東地中海世界』岩波書店, 1977年, 32-33頁。
- 2) G.F.Bass, Oldest known Shipwreck Reveals Splendors of the Bronze Age, *National Geographic* 172, 1987, pp.692-733.; do., Evidence of Trade from Bronze Age Shipwrecks in N.H.Gale(ed.), *Bronze Age Trade in the Mediterranean*, SIMA XC, 1991, pp.69-81.
- 3) 拙稿, 「ミケナイ期ギリシャの船舶」『オリエント』40巻2号, 1997年, 34-50頁。
- 4) *supra* 2) の他, G.F.Bass, A Bronze Age Shipwreck at Ulu Burun (Kas): 1984 Campaign, *AJA* 90, 1986, pp.269-296.; G.F.Bass & C.Pulak, Excavations at Ulu Burun in 1986, *AJA* 93, 1989, pp.1-12.; G.F.Bass, Prolegomena to a Study of Maritime Traffic in Raw Materials to the Aegean during the Fourteenth and thirteenth centuries B.C., *AEGLAEUM* 16, 1997, pp.153-170.
- 5) J.T.Killen, On the Mycenaean Tablets, in A.Heubeck & G.Neumann, *RES MYCENAEAE*, Göttingen, 1983, p.226.
- 6) *ibid.*, pp.218-219, n.6, 7.
- 7) M.Ventris & J.Chadwick, *Documents in Mycenaean Greek*, Cambridge, 1973², pp.226-227 (以下 *Docs.* と略記); L.Baumbach, *Studies in Mycenaean Inscriptions and Dialect 1953-1964*, Roma, 1968, p.180.; L.R.Palmer, *The*

- Interpretation of Mycenaean Greek Texts*, Oxford, 1963, pp.272,429.
- 8) *Docs.*, p.586.; Killen, *op.cit.*, pp.227-228.
- 9) C.J.Ruijgh, *Etudes du Grec mycénien*, Amsterdam, 1967, p.309 は, da-ra [-qa mi-] ta-qaと補い, 'drave et minthe' とするチャドウィックの解釈を紹介しているが, 単位の記載がないことは問題としている。δράβη はイヌナズナ属アブラナ科の草木で, 北半球に広く分布している。
- 10) *Docs.*, p.230.; Palmer, *op.cit.*, pp.273,425.; Baumbach, *op. cit. 1968*, p.132 は [a]-ka-ra-toと補い, 純粹の(葡萄酒)と解釈するマリナトス説を紹介している。
- 11) *Docs.*, p.226.は商品 (skhoinos) を叙述する形容詞で, skhoinosに用いられる容器か単位と解している。; Palmer, *op. cit.*, p.273.
- 12) Killen, *op. cit.*, p.226 特にn. 32.
- 13) *ibid.*, pp.220-222.
- 14) *ibid.*, p.232. Killenの報告を受けての討議で, Ilievskiは, これらの品目の不足は文書に記載されている個人に対して, または個人によって支払われたか否かは不明としているが, ここでのdat. の解釈は①Ke-poに対する不足なのか, ②Ke-poによる不足のいずれともとれる。ここでは②と解釈する。
- 15) *Docs.*, p.565.; P.Chantraine, *Dictionnaire Etymologique de la Langue Grecque*, Paris, 1974, p.841.
- 16) Killen, *op. cit.*, p.226.
- 17) *Docs.*, p.581. sarpidesは数えられる産品を入れる容器と解している。
- 18) *Docs.*, pp.221-223,557-558.
- 19) *Docs.*, p.573.; J.Chadwick, *the Mycenaean World*, Cambridge, 1976,p.121.; L.Baumbach, *Studies in Mycenaean Inscriptions and Dialect 1965-1978*, Roma, 1986, p.349.
- 20) *Docs.*, p.558.
- 21) Palmer, *op.cit.*, p.431.; *Docs.*, p.223.
- 22) *Docs.*, p.554.
- 23) Baumbach, *op. cit. 1986*, p.326; J.L.Melena, Ki-ta-no en las tablillas de

- Cnoso, *Durius* 2:1, 1974, pp.45-55. (未見)
- 24) Baumbach, *ibid.*, p.326.; J.L.Melena, La Producción de plantas aromáticas en Cnoso, *Estudios Clásicos* 20, 1976, pp.177-190 (未見)
- 25) Chadwick, *Myc. World*, pp.120-121.
- 26) *ibid.*, p.99.
- 27) J.L.Melena, Coriander on the Knossos Tablets, *Minos* NS15:1-2, 1974, pp.137-140.
- 28) Chadwick, *Myc. World*, pp.100-101.; Palmer, *op.cit.*, pp.258-259.
- 29) *Docs.*, p.441.
- 30) *Docs.*, p.pp.223-224では、7行目の葡萄酒*131と8行目の*131bと区別されており、8行目は、葡萄酒になる前の葡萄液あるいは新葡萄酒としている。
- 31) *Docs.*, p.222.; Chadwick, *Myc. World*, p.119.
- 32) *Docs.*, p.227.
- 33) *Docs.*, p.226.
- 34) Chadwick, *Myc. World*, p.120.
- 35) *Docs.*, pp.227,555.; Chadwick, *Myc. World*, p.120.
- 36) Bass, *AEAGAEUM* 16, pp.163-164.
- 37) Y.Duhoux, Les Contacts entre Myéniens et Barbares d'après le Vocabulaire du Linéaire B, *Minos* NS 23, 1988, pp.75-83.
- 38) J.L.Melena, po-ni-ki-jo in the Knossos Ga Tablets, *Minos* NS 14, 1973, pp.77-84.
- 39) Chadwick, *Myc. World*, p.121.
- 40) *Docs.*, p.226はペルシャの例としてXen. Cyr. I. 2. 8とAlian. Var. hist. 39の記述をあげている。
- 41) Killen, *op. cit.*, p.216,n.1.